



Title	社会人、食品衛生監視員としての3年間
Author(s)	山口, 侑子
Citation	大阪公衆衛生. 2014, 85, p. 23a-23a
Version Type	VoR
URL	https://hdl.handle.net/11094/78801
rights	
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

The University of Osaka

社会人、食品衛生監視員としての3年間

山口 侑子

大阪府泉佐野保健所 食品衛生課

私は大学を卒業してすぐに大阪府に入庁し、現在食品衛生監視員3年目として保健所に勤務しています。卒業時、諸先輩方からは「ひとつの仕事」を3年続けて初めてその仕事分かる、逆をいえば3年以上仕事を続けなければ何も残らない」と言われました。このアドバイスを受けてか、社会人1年目の私の日記帳には「石の上にも3年」というフレーズが散在していました。今でこそ笑いながら読み返せますが、前後の文章からすると、これを書いているときの私は本当に必至だったのだな、と感じます。具体的な業務内容は多岐にわたりますが、そのすべてに共通することは、相手に説明し、誤解を生じさせずに正しく理解してもらうことだと考えます。当たり前のことかもしれませんが、それまで教えを「受ける」立場だった私にとっては、知識面においてもコミュニケーション能力面においても至難の業で、なおかつ自分の発した言葉に100%の責任を持たなければならないという重圧感に押しつぶされそうでした。食べ終わったバナナの皮を自分の目の前においてその皮で滑ってこける、というような失敗を何度も経験しました。中身もろくに詰まっていらないのに自分を大きく見せることばかりにとらわれていた時期もありました。思えば、自信と責任感の裏付けは知識の蓄積であることに気づくのに1年近くかかりました。

食品衛生監視員の業務で求められる知識は、食品衛生法に基づくものが大半です。日々の仕事は「よくあること、予測しうること」+「めったにないこと、予期せぬこと」で構成されています。後者に直面した時、分厚い食品衛生小六法のページを繰りながら答えを見つけるたび、こうして自分で手を動かし調べる努力の積み重ねこそが糧になるのだろうか、と感じます。また、前者についても根拠となる法令に立ち返ることを忘れてはなりません。

とはいっても、本来楽しさを提供してくれる「食品」を法律越しに捉えてばかりでは、堅苦しく窮屈に感じてしまいます。そこで私は、普段の生活に関連させながら仕事とお付き合いするよう心がけています。たとえば、買い物で食品の表示をチェックしたり、日常の食卓で幼い子供たちとジנגスカンを食べながらトングと箸の使い分けを啓発したり、友人の腹痛の原因を推測してみたり…ささいなことではありますが、こうすることで「ありふれた気づき」を再発見しながら、仕事に取り組むことができるような気がするのです。

これからも「仕事も私生活も真面目に楽しく」をモットーに、食の安全安心向上に貢献していきたいと思います。